令和５年度卒業研究概要

国語

自治能力を高める学級経営 ―子どもに規範意識を持たせながら―

山田　優香

現在，東京都では子供たちの規範意識の育成に力を入れて取り組んでいくことが求められている。東京都教育委員会が平成27年に「東京の子供たちの豊かな心の育成に関するアンケート調査」を行った。この調査では，東京の子供たちの印象について，28.3％の人が「規範意識がたりない」ことを挙げた。また，私が教育実習に行った際に，学級経営が上手な先生の学級は，子どもたちの規範意識が十分に養われていると感じた。これを踏まえ，本論文では主に規範意識を育む学級経営について，また学級経営の課題や望ましい指導体制についての研究を行う。

第1章では，規範意識の育て方について述べる。小学校6年間でどのように規範意識の育み方が変化していくのか，東京都の子どもたちの規範意識の現状を踏まえ，学年ごとの規範意識の育成に関わる主な指導内容について調べたことを基に考察を加えたいと思う。

第2章では，教育実習先の児童の実態について述べる。教育実習の前半はまだ児童ひとりひとりの実態を理解できていなかったが，実習の後半では，自分で授業を行い始めるなど，児童とのかかわりが生活面と学習面で増え，児童一人一人の特性や実態を深く理解していった。このような児童との関わりの変化について，児童の実態を織り交ぜながら調べたことを基に考えを述べる。

第3章では，教育実習先の先生方が感じる級経営の課題と対策について，そして，これまで調べたことを基に，生活面と学習面に分けた望ましい指導体制について提案した。

国語科におけるスタートカリキュラムの取り組み方 ―小学校１年生の国語の教科書から―

田中　風沙

幼保小の円滑な連携のために，アプローチカリキュラムやスタートカリキュラムなどが実施されている。しかし，環境や教育・保育方針等の大きな違いからそのギャップは大きい。遊びを通して学んでいく幼稚園・保育園とは違い，小学校では決められた時間に決められた内容を学ぶ。連携において様々な課題が挙げられる中，その課題を踏まえたうえでの教科の視点に落とし込んだ幼保小連携の授業をしていきたいと考えた。すべての学びの基礎となる国語科において小学校入門初期の授業の進め方について考える。

本研究は，小学校国語科で現在使用されている各4社の教科書会社（光村図書・東京書籍・学校図書・教育出版）の教科書を比較する中で，共通するポイントやそれぞれの指導方法から重要だと考えられる部分を洗い出したのち，教育実習の経験を基に授業を提案したものである。

構成は以下のとおりである。第1章では，幼保小連携についての現在の取り組みや現状について述べる。第2章では，学校教育において「教育課程の構成に応じて組織排列された教科の主たる教材」として挙げられている教科書（国語科）の分析や比較を行う。第3章では，各教科書の分析や比較を基に，教育実習での経験や授業見学を参考にして小学校入門期国語科の授業について提案を行う。そして，最後に本研究で新たに明らかになった今後の課題についての私見を述べる。

「読むこと」の授業における内言の活用 ―子どもの呟きに着目して―

西川　乃愛

以前から頭の中の声について関心を持っており，発達心理学の授業で内言について知る。覚えさせることから考えさせることに授業転換が行われている今，思考のツールとしての内言に着目し，小学校国語科学習指導での内言の活用について考えたいと思ったことが本研究の動機である。

内言については，幼児期の言葉の発達という観点では研究されているが，小学校の学習指導に活用するという観

点ではほとんど研究されていないことが分かった。本研究では，授業実践を振り返るという方法で考察し，「読むこと」の授業における内言の活用を提案したうえで，内言を活用した授業に有用性があることを述べる。

本論文の構成は以下の通りである。第 1 章では，本論文で使用する諸概念について述べる。内言の定義と内言を見取る方法について確認し，小学校国語科における内言の位置付けについて述べる。第 2 章では，内言と子供の呟きの関係性を示す。第 3 章では，教育実習で「言葉の意味が分かること」（第 5 学年）の教材を用いて実践した自らの授業を振り返り，考察を述べる。第 4 章では，考察をもとに「想像力のスイッチを入れよう」（第 5 学年）の授業提案を行う。内言を活用した授業の組み立て，内言を見取る方法と内言を活用した授業の有用性についてまとめ，本論文の結論を述べる。

子供の心を育む文学の授業 ―教材「ごんぎつね」（4 年生）を基に―

井口　愛菜佳

本研究の動機は 2 つある。1 つ目は，子供の心を育む道徳の授業で物語文を読むのに，なぜ国語の授業でも物語文を読むのか疑問に思ったこと。2 つ目は，小学校のボランティアで，物語文の授業が子供の心を豊かにしていることを目の当たりにしたことである。Iot や AI などの技術革新がますます進展している近年だからこそ，人間ならではの強みである豊かな「心」を育むことがより一層求められている。私は，国語教育の特に文学の授業で，子供の豊かな心を育みたいと思い本研究を始めた。

本研究は子供の豊かな心を育むために，文学の授業が必要であることと，子供の豊かな心を育む文学の授業の方法を研究した。さらに，その方法を具体化するために，4 年生の文学作品である「ごんぎつね」の授業提案をしたものである。

第 1 章は，子供の「豊かな心」を育むには，道徳教育に並び国語教育が重要であることを考えた。第 2 章では，文学の授業の必要性とともに，子供の豊かな心を育む文学の授業の方法を研究した。第 3 章では，4 年生の教材である「ごんぎつね」の授業提案をする中で，子供の豊かな心を育む文学の授業を具体化した。

伝統的な物語教材を生かした授業実践 ―「かさこじぞう」の授業提案を例として―

久保田　春風

本を読むことを通して，民話や昔話の表現の面白さや再話の違いについて興味を持ち，多くの国語の教科書で採択されている伝統的な物語にはどのような特徴があり，教材としてどのように活用できるのか考えたいと思ったことが本研究の動機である。また，教育実習を通して，叙述を根拠に子どもたちの考えを形成することや多様な読みを生かすことの大切さに気付き，文学的文章をより深く研究したいと考えたことも動機の一つである。

本研究では，伝統的な物語教材を教材としてより有効に活用するための授業づくりについて研究した。そして，第 2 学年「かさこじぞう」の学習指導案の作成を通して，実践の様子を具体的に想定し，授業提案を行った。

第一章では，一般的な文学的文章教材とは異なる伝統的な物語教材の特性について整理した。第二章では，目標及び評価と学習活動について検討し，第一章で述べた伝統的な物語教材の特性を生かした授業づくりの方法を研究した。第三章では，第 2 学年「かさこじぞう」の教材を用いて授業提案を行い，伝統的な物語教材の特性を生かした授業づくりについて具体化した。

初等教育における国語辞典の効果的な活用について

郷田　佳佑

本研究の動機は，現代初等教育において国語辞典（以下『学習国語辞典』と表記する）の使用頻度が少ないこと，そして子どもたちの「言語能力の育成」が求められていることから，よりよい学習国語辞典の活用方法があるのではないかと考えたことに起因する。

幼少期の間から学習国語辞典を使用し，たくさんの言葉に触れることで言語能力を養うことができることは事実であるが，現代の学校教育カリキュラムにプラスアルファで学習国語辞典を使用する授業や時間を作る隙などない。

そこで，予め学校教育カリキュラムに含まれている第３学年の学習国語辞典の単元の授業をベースとして子どもたちの興味・関心を引き出し，子どもたちが自主的に学習国語辞典を使い，言葉に触れることができるようにしたいと考えた。学習国語辞典の性質を上手く活用した学習方法の習慣化を図り，第３学年の間に関わらず，その後の第４学年，第５学年と永続的な活用を通して「言語能力の育成」を目指していく。

第１章では学習国語辞典の性質と現代初等教育における学習国語辞典の背景と課題について述べる。第２章では学習国語辞典の効果的な活用方法について調べ，考察する。第３章では第２章で挙げた学習国語辞典の効果的な活用を子どもたちが長期間に渡って行っていくことのできるようなベースとなるモデル授業を提案する。

理科

「主体的・対話的に学習に取り組む理科授業デザイン」
―理科教授・学習プロセスマップによる講座学習の実践から―

三好　結万

平成 29 年度告示の学習指導要領では，育成を目指す資質・能力が３つの柱で整理された。そして，３つの資質・能力を育成するために「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められている。これを受け筆者は理科授業において子どもが主体的・対話的に学習に取り組む理科授業をデザインして実践した。授業デザインを考えるにあたり，２つの視点から考えた。第１の視点は学習意欲を喚起する動機付けである。第２の視点は学習者同士が学び合う協働的な学びである。第１章では，本研究の背景にある問題の所在と研究の目的について述べた。第２章では，動機付け，協働的な学び，自己調整学習について述べ，関連性を明らかにした。そして，理科授業における，コンサマトリー性の動機付けと達成性の動機付け，協働的な学びに着目した授業デザインを考察した。第３章では，教授・学習プロセスマップ（小野瀬・佐藤 ,2020）を援用し，動機付け，協働的な学びに着目する講座学習の授業をデザインし，その実践と分析を行った。分析の結果，コンサマトリー性の動機付けと達成性の動機付け，協働的な学びに着目した本研究の授業デザインが有効であったことが明らかになった。

理科学習における協働的な学習

沼田　純怜

「PISA2018」「TIMSS2019」の結果から，我が国の子どもは，判断の根拠や理由を明確にしながら自分の考えを述べることや，相手を想定して自分の考えを述べることに課題がある事がわかった。また，平成 29 年度告示の学習指導要領理科編では,「主体的･対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進する事が求められている。そこで,「対話的」の部分に着目し理科授業における子どもの考えの変容の分析で協働的な学習の意義を明らかにすることとした。

第１章では，本研究の背景にある問題の所在と研究の目的について述べた。第２章では，協働的な学習と構成主義的な理科授業の展開を行うことができる指導計画立案の視点である理科教授・学習プロセスマップについて述べた。そして，子どもの考えの変容を分析するために用いた概念プロフィールについて述べた。第３章では，理科授業の参与観察と授業実践を協働的な学習の視点から捉えて，概念プロフィールを用いて分析した。その結果，協働的な学習によって，子どもの考えが変容したり，新たな視点ができたりすることが明らかになった。研究のまとめとして本研究から得た知見をもとに理科教授・学習プロセスアップを援用して理科授業を提案した。

多様な集団で学び合いを引き出す理科授業デザイン

大久保　真琴

本研究では，OECD が定義した「キー・コンピテンシー」で示された,「社会的に異質な集団で交流する力」や，中央教育審議会答申（2016）において示された,「多様な他者と協働する力」など，これからの時代を生きる子ども

に育成が求められる資質・能力を明らかにし，問題の所在（第 1 章）とした。また，平成 29 年度告示の小学校学習指導要領特別活動編 理科編において，多様な他者と協働することや，他者と問題解決する態度を養うことについて示されている。そこで，本研究では，異学年集団を対象として，有意義な学び合いを引き出す理科的な授業をデザインすることとした。

第 2 章では，授業の目的を明らかにし，学び合いを有意義に成立させるために必要と思われる視点について述べた。第 3 章では，授業実践の有用性を分析するために，藤森・小野瀬（2018）が措定した，生活科における教授・学習モデルに位置付けた評価指標を援用した。そして，異学年集団での学び合いにおいて必要と考えられる新たな視点を取り入れ，評価指標を作成した上で授業実践を行い，意義や課題を明らかにした。第 4 章では，本研究での実践から明らかになったことを基に，学級でのより良い学び合いを引き出す理科授業デザインを提案し，研究のまとめとした。

理科学習における子どもの情意面の見とり ―運勢ライン法の活用―

山口　綺良

PISA2018，TIMSS2019 の結果から，我が国の子どもが自分の言葉で考えをまとめ，発表することに課題があることがわかった。また，学習の意味や目的を見いだせていないこと，子どもの興味・関心を引き出す課題や学習問題が設定できていないと考えられる。そして，PISA 調査結果における各課題に対応した新学習指導要領の実施として「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善の実現」が求められている。

本研究では，（1）学習動機に注目した効果的な授業デザイン（2）協働的な学習に注目した効果的な授業デザインの 2 つを目的とし，子どもが主体的・対話的に学習に取り組める講座学習を行うことにした。第 1 章では，子どもの情意面の研究に対する動向について述べた。第 2 章では，構成主義の視点から見た情意について述べた。第 3 章では，講座学習の授業場面における子どもの情意面の変容について，運勢ライン法を用いたワークシートから分析した。本研究から，運勢ライン法では子どもの情意面の変容を見とることや授業全体を評価することに有用であることが明らかになった。

構成主義的な理科授業における学習問題成立の条件

相馬　悠人

令和 4 年度の全国学力学習調査の結果より，日本の子どもは気づいたことを基に分析して解釈し，適切な問題を見出すことに課題があることがわかった。また，平成 29 年度告示の小学校学習指導要領解説　理科編において，教科の目標の一つに構成主義的な考え方が見受けられた。そこで本研究では，児童が問題を見出す場面である学習問題成立の場面に着目し，小学校の理科の授業を構成主義的な見方の一つである「教授ストラティジー」を用いて授業分析を行い，学習問題が成立するための条件を明らかにすることとした。

第 1 章では，日本の児童の課題を明らかにし，学習指導要領と構成主義の共通項について明らかにした。第 2 章では，構成主義について述べたのち，構成主義的な理科授業の 1 時間の流れを明らかにして，構成主義的な理科授業において学習問題が成立するための条件の仮説を立てた。第 3 章では，小学校 5 年生の理科の授業をプロトコルに起こし，教授ストラティジーを用いて分析を行い，仮説の検証と今後の課題をまとめ，本研究のまとめとした。

理科学習における子どものイメージ図の活用の意義とその評価に関する研究
―理科講座学習の実践と分析から―

竹部　歩望

PISA2018 によると，日本の子どもは，自分の考えを根拠を示して説明することに課題があることがわかった。また，平成 29 年度告示の学習指導要領では，3 つの資質・能力を育成するために，「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められている。現代の子どもには，自分の考えを表現する記述力と深い学びを伴う能動的に学習する力が求められていることが明らかになった。本研究では，自己の考えを広げ深める手段である「イメージ図」に着目し，理科

授業におけるイメージ図の有用性を明らかにすることとした。

そこで，第１章では，理科授業において，子どもの表現ツールであるイメージ図・概念地図法・運勢ライン法を取り上げた。第２章では，中学校での講座学習の実践で得た，イメージ図及びそこに書き込まれた言葉を共起ネットワークで言葉の繋がりを可視化し，分析した。その結果，理科授業におけるイメージ図の有用性が明らかになった。第３章では，本研究の成果並びに今後の課題をまとめ，本研究のまとめとした。終章では，本研究を進めていく中で筆者が強く感じた，「相手に伝えること」の大切さについて述べた。

算数

アルバイトに対する形成的アセスメントの効果検証

木　下　　周

本研究の目的は，ファミレスチェーン店の新人アルバイト教育において，形成的アセスメントの考えに基づいた教育評価を実施し，その効果をワークモチベーション（協力志向的モチベーション，学習志向的モチベーション）と業務スキル（会計対応を主とするホール業務，注文対応を主とするホール業務，キッチン業務）の観点から検討することであった。筆者のアルバイト先であったファミレスチェーン店の新人アルバイト 15 名に対して，筆者自身が形成的アセスメントの５つの方略（即時的フィードバック，学習のエビデンスの誘起，協働関係の強化，達成クライテリアの明示，自己調整の促進）を三か月間実施した。その結果，ワークモチベーションの変化はあまり認められなかったものの，業務スキル，とりわけ注文対応を主とするホール業務に関するスキルの向上には一定の効果が認められた。

社会・総合

ADHD 児とその対応

菅　愛里花

私の友人には，ADHD の人がいる。そこで初めて自分の身近にも ADHD を抱えている人がいることを知った。ADHD が発達障害の１種であることは知っていたものの，落ち着きがない・声が大きいなど，なんとなくの症状は理解しているつもりだった。しかし，友人が ADHD であることを知ったとき，自分に ADHD についての現実的な対応の知識がほとんどないことを思い知らされた。

私は小学校教諭を目指し，大学で初等教育を学んでいる。自分の友人は成人の ADHD であり，小児の ADHD は成人の場合と何が違うのか興味・関心が強くなった。

ADHD は発達障害の中でも患者数が特に多い。将来自分が小学校教諭になって，ADHD 児のいる学級をほぼ必ず受け持つことになるだろう。その時に ADHD 児に対して，どのような指導が望ましいのか。また学校という集団生活の場で，ADHD 児が生活・学習しやすい環境を学校側がつくるにはどのような対応をとるべきなのだろうか，考えさせられた。

以上のことを踏まえ，この論文のテーマを「ADHD 児とその対応」と設定し，具体的な対応を考察していくこととした。

小学校に於けるキャリア教育について ―人間関係形成能力を軸に―

小野寺　紘平

「キャリア教育」と聞くと何を思い浮かべるだろうか。職業体験学習と答える人が多数を占める様に考える。かくいう私もその１人である。

キャリア教育は若者の職業的自立を目的として成り立った背景がある。しかし，そういった職業体験学習が今の

私たちに一体何を与えだろうか。私がただ学ばなかっただけなのかもしれないが，職業体験学習が，私の職業選択に影響を与えたとは言いきれないだろう。

キャリア教育とは「一人一人の社会的・職業的自立に向け，必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して，キャリア発達を促す教育」と定義されている。職業的自立に向け，必要な基盤となる能力や態度が育てることが大切であるのだ。しかし，職業的自立に必要な能力とは一体なんだろうか。その核となるのは「コミュニケーション能力」であると考え，「小学校におけるキャリア教育について　ー人間関係形成能力を軸にー」をテーマとした。そのため，この論文ではキャリア教育における「コミュニケーション能力」を文部科学省から打ち出された能力体系の考察を通して研究していく。また，それられを踏まえ，小学校教育を通してコミュニケーション能力を育成するカリキュラムを提案している。

小学校における LD 児とその指導

吉見　海音

LD という発達障害を聞いたことがあるだろうか。LD とは「Leaning Disability」の略称であり，日本語では「学習障害」という。私はこの LD という発達障害を耳にしたことがなかった。しかし，この発達障害を持つ子供は全国で約 23000 人もいることを知った時，そんなにも多くの子供がいるのに，ADHD や自閉症と違ってなぜ耳にすることが少なかったのだろうか，どんな支援，指導をするのがいいのだろうかと興味がわいた。もし教師として LD に対する知識が薄いと，いざ LD の児童に支援，指導をするときに何もできない。担任としてクラスを持つとき，LD の児童に最適な支援・指導ができるように，論文のテーマを「小学校における LD 児とその指導」とし，そもそもの LD の定義であったり，LD 児が生活しやすいよう学校とともに支援してくれる場であったり，LD から派生する 2 次被害までを含めて考え研究していくこととした。また，それらを踏まえ，LD の中でも分かれる 3 つのタイプを「個別，集団，保護者」の観点からどのような支援，指導をしていくことが最適なのかを捉え，実践例を挙げて考察していくこととした。

沖縄戦をどう教えるか ―子どもと戦争―

古賀　涼花

太平洋戦争が幕を下ろした78年前の8月15日。そこから遡った3月26日，唯一の地上戦である沖縄戦が始まった。

あの「戦争」の悲惨さや恐怖を今，どれぐらいの人々が知っているのだろうか。悲劇を後世に繋げることは，同じ過ちを繰り返さないために不可欠なことである。

そもそも沖縄戦が起きたのはなぜか。太平洋戦争の最中，「持久戦」を余儀なくされたのはなぜか。多くの島民の方々が犠牲となったのはなぜか。様々な疑問がある中で，凄惨な沖縄戦は起きたのである。今を生きる，沖縄戦を体験した人々は，子どもの頃の記憶として語り継ぐ人もいる。記憶に蓋をしてしまった人もいる。思い出したくもないほどの非日常があったのである。沖縄戦を理解する上で，当時の子どもたちの生活，教育を知ることは重要なことだと思われる。子どもたちを含め，どれだけの人々が苦しめられたのだろう。

教育者になる私たちは，平和な社会の担い手となる子どもたちにこの事実を伝えなければならない。沖縄戦で曽祖父を失った私は，戦争が何を生み出したのか，疑問を抱いた。子どもたちにも「戦争」を知り，そこから自分事として学び取ってもらいたい。そこで「沖縄戦をどう教えるか　～子どもと沖縄戦～」というテーマを設定し，子どもの視点から沖縄戦を捉え直すこととした。

政治参加と子どもの学び

松岡　純平

2022 年 7 月に参議院選挙が行われた。この選挙へ参加する意思があるかと大学生にアンケートを取ると，多数が参加すると回答した。実際の選挙への参加率だけを挙げ，若者は選挙に興味がない，つまり政治に関心がないと決めつけることは，より若者の政治離れを大きくさせる安直な意見であると受け止めた。なぜ若者は選挙に行かないのか，

政治に関心を持てないのかについて分析し，それを改善し若者が積極的に政治に参加する国になるためにできることについて考えることが，今求められる。

そこで私は，学校教育を通して全ての国民が政治に関心を持つ国にしたいと考え，論文のテーマを「政治参加と子どもの学び」と設定した。

論文構成としては，第１章で日本人の政治参加の現状について，各世代との比較を通して抑え，若者から見た政治について選挙を中心に論じる。第２章では学校教育に焦点を当て，日本の公民教育を紐解く。第３章ではシティズンシップ教育について論じ，小学校教育に視点を絞り，まだ選挙権を持たず社会への視野が広がっていない小学生に対する具体的な指導を考え，小学６年社会科の学習指導案を提案する。

プラスチックごみと問題について

佐藤　歩奈

海岸や川岸に行くと，たくさんのプラスチックごみが漂流，散乱している。それらは私たち人間が捨てているものがほとんどであり，今の私たちの生活にはプラスチック製品は欠かせないものになっている。しかし，プラスチック製品は便利である反面，海洋プラスチックごみ問題のように，今，多様な問題が起こってしまっている。そこで，プラスチック製品にはどういった問題が発生しているのか，解決策はあるのか，この問題について今の子どもの視野から考え，実践していくことが解決への道になると考え，テーマを「プラスチックごみとその問題について」と設定した。

また，SDGs という言葉を耳にしたことがある人は多いだろう。SDGs とは，2030 年までに「持続可能でよりよい世界を目指す国際目標」である。SDGs は発展途上国のみならず，先進国自身が取り組む普遍的なものであり，日本としても積極的に取り組んでいる。プラスチックごみ問題に関して，SDGs の観点からもその背景や取り組みについて追及していく。それらを踏まえ，小学校における総合的な学習の時間において，環境学習の教材ととらえ，新たな環境学習を提案していく。

図工

水墨画の表現技法について

井上　大也

本研究では，水墨画の多様な表現技法の特徴について調べ，小学校図画工作科に水墨画の学習を取り入れる際，どのような授業を構成することができるかを検討した。

まず，水墨画は，描く対象によって適した表現技法を選択することで描き易くなり，表現の幅を広げることが出来ること，その際，水を適度に吸い込む料紙を使用することが重要であることが確認された。にじみ等の表現技法で墨を撥ね散らかしたり，墨を注いだりなどして偶然出来た墨色や模様を活かして描くなどの表現技法は，水墨画ならではの表現である。筆と鉛筆 , 筆ペン等では力の入れ方がかなり違うが，習字の経験を活かせば，基本的な運筆方法を用いた扱いやすい技法は誰でも身に付ける事が出来ると考えられる。

水墨画の教材としての魅力はまず，モノトーンの世界を体験できる所である。黒一色という単色での表現に制限されているからこそ，白と黒のモノトーンの美しさや単色で表現することの面白さや難しさを体感することができる。更に，筆を用いて表現するため，鉛筆やペンとは違った表現の楽しさを知ることができる。小学校で水墨画を指導する際には，にじみ・ぼかし・かすれの３つ表現技法を指導することが適していると考えられ，これらの表現技法をすべて児童が体験することにより，水墨画の面白さや難しさに気付けるようにすることが重要である。

音楽

アニメ『エヴァンゲリヲン新劇場版：序』の劇中 BGM と登場人物の感情表現

濱本　魁誠

今回，『エヴァンゲリヲン新劇場版：序』の劇中 BGM による登場人物の感情表現についての研究を行った。先行研究において，非言語においての感情表現をリズムやタイミングにより表現をする研究，エヴァンゲリヲンにおいて庵野秀明監督は音楽と映像の対比を用いる研究がありその二つをもとに視聴し分析を行うのが今回の研究目的である。

分析方法として，『エヴァンゲリヲン新劇場版：序』を視聴し，ＢＧＭの特徴，物語の進行，登場人物の感情表現の三項目で分析を行った。

分析結果として，以下の三つのことが分かった。一つは登場人物が一人の場合や二人で掛け合いを行っている場合には一つの楽器を中心とした音楽が用いられていることが分かった。二つ目に同じ音楽の序盤や，中盤，終盤，一つの音楽のテンポの流れを用いり，感情の流れや NERV 職員の急ぐ感情を表現していることが分かった。三つ目は「音楽と映像の対比」が本研究で扱った作品にはなかったということが分かった。

まとめとして，今回の研究では BGM に着目して分析を行ってきたが，エヴァンゲリヲンシリーズを視聴していて，SE でも感情表現を行っているのではないかという疑問も出てきたので次回の研究では SE にも着目して分析をしてみても面白いと感じた。

運動会の BGM について ―大学生への質問紙調査を元に―

宮川　ステファニー

本研究では，小学校の運動会で再生される BGM に着目し，選曲や実際に再生された BGM の中で参加者の記憶に残った曲を調査から分析し，運動会に適した BGM を検討した。

国士舘大学の初等教育養成過程を専攻する学生が主体となり開催された「第 36 回　初等教育運動会」に参加した学生を対象に調査を行った。

まず，運動会開催前にＢＧＭの決定を担当する放送係の学生に運動会中に再生したいＢＧＭとその曲を選んだ理由を回答してもらい，選曲された 25 曲とランダムに選択した楽曲，合計 54 曲を運動会当日にＢＧＭとして再生した。

そして，運動会開催後に，参加した学生を対象にＢＧＭの中で印象に残った楽曲とその曲を選んだ理由を回答してもらい，運動会のＢＧＭについて考えたことなどあれば自由に記述してもらった。

調査の結果，運動会での BGM の使用に対してポジティブに考える学生が多く，参加者の気分調整や雰囲気を盛り上げる効果があることが分かった。また，「盛り上がる」「ノリがいい」曲が運動会に適しているとされていて，①長調である，②４分の４拍子である，③テンポが 132 ～ 145bpm，④青春時代に知名度の高かった曲，が特に当てはまり，K-pop や洋楽など幅広いジャンルの曲が運動会に適していることが分かった。

動画共有サービスにおいて再生数の多い邦楽曲の特徴の分析

小口　大登

本研究の内容は，動画共有サービスの一つである，YouTube にて，再生数が 3 億回を超えている邦楽曲についての分析を行った。本研究の行う意義としては，近年，YouTube 等の動画共有サービスが普及していき，音楽を視聴する際も，そのような媒体を利用する人々が増えて言っている中で，そのような媒体で，再生回数を多く獲得している楽曲を分析すると，現代の音楽の嗜好の傾向などが知ることができるのではないかと感じたところである。

対象楽曲は 10 曲であり，分析内容は，曲のテーマ，歌詞について分析し，特徴を見つけていくという内容である。またそれらに加え，テンポ，調，タイアップの有無等の楽曲の基本情報を調べていき，多くの人々に聴かれている理由や歌詞との結び付き等，楽曲を特徴付ける相関関係があるのかどうかを探っていった。分析を行う上で，注意した点は，歌詞の分析の部分で，自分が歌詞を拝見して，その楽曲の情景，伝えたいこと，主人公の心情を読み解

いていき，他者の意見，タイアップ作品の世界観に捉われない分析を重視して行ったところである。

RADWIMPS を特徴付ける語彙の分析

延藤　友也

本研究は，RADWIMPS の音楽を特徴づける語彙に焦点を当て，全 170 曲の公開年による特徴の変化を KH coder を使用し，探求する方法で比較を行なっている。

RADWIMPS に関連した論文には，山根の論文が，KH coder を使用し年代別変化を分析した研究には，大出らの論文があるがいずれも RADWIMPS の全曲の年代別変化を対象にしたものではない。

調査は，RADWIMPS が作詞した全 170 曲を対象に KH coder を使用し，頻出語を抽出しコーディングルールを用いて，映画「君の名は。」が公開される前と後の推移，公開前後の比較の 3 つの項目を分析している。

結果は，公開前の推移ではポジティブの項目，公開後の推移ではネガティブの項目，公開前後の比較ではその他人称の項目に顕著な違いを発見した。これらは，恋人との別れやメンバーの活動休止など野田洋次郎の人生が曲に表れているためだと考える。しかし，曲に込められたメッセージや自身の考え方にはどんな年代であってもそこに大きな変化がないと言える。

今後の課題としては，公開年以外の観点である曲名やアルバムの項目，歌詞の中で使われる隠された別の表現を分析していきたい。

効率的な歌唱指導法について ―ピアノ，歌唱合成，教師による範唱の比較―

梅津　友花里

本研究では，歌声合成ソフトによる音源と，ピアノの音源，人の歌声ならば，どの方法を取ることが歌唱指導として最も正確かつ効率的なのかについて検討した。

まず，先行研究からそれぞれの歌唱指導法の特徴や良さ，欠点について論じた。次に，21 歳から 23 歳の大学生四人を対象に，《すてきな友達》の範唱と，歌声合成ソフトで作成した《星とたんぽぽ》，ピアノを弾いて録音した《さようなら》の 3 種類の音源を用いた実験を行った。

この実験の結果，最もリズムと音程を正確かつ効率的に覚える歌唱指導法については，人により異なることが分かった。一方で，実験対象の四人中三人が教師による範唱で，リズムもしくは音程で最も正確性の高い数値を出しており，残りの一名も音源ごとの最も正確性の高い数値を比較した際に，二番目に正確性の高い数値を出していた。また，全ての対象者において，唯一音程が合っていた数で 0 回を出していなかった方法であることから，教師による範唱は最も対象者との相性に左右されにくいことも分かった。その他にも，聞く回数が多くなるほど，リズムが正確に歌えるようになることや音源を聴く回数を重ねたからといって，必ずしも音程がより正確に歌えるようになるとは限らないことが分かった。

体育

クラシックバレエの動きを取り入れた体つくり運動について

中島　里彩

本研究では，「豊かなスポーツライフの実現」を目指して，全ての子供が体育の授業を楽しみ，運動好きになるために，小学校低学年を対象とした体つくりの運動遊び，イ多様な動きをつくる運動遊びの授業で，クラシックバレエの動きが効果的であるのかについて明らかにすることを目的とした。

研究の結果，検証授業では，クラシックバレエの動きを取り入れた体つくりの運動遊びは，授業のねらいを達成することができたと過半数が回答し，教材としての可能性があることが明らかになった。しかし，ねらいの達成度が 100％ではないことや，対象学年は低学年よりも中学年の方が可能であるという意見が多いことから，活動の方法

や発達段階を見直す必要があることも明らかとなった。

これらのことから，①ねらいを達成するために指導過程を改善すること，②発達段階に応じて指導を行うことができるよう動きに段階をつけて分類すること，③他の可能性を持つ多様な動きについて研究を行うことの 3 点に焦点を当て，体つくり運動領域にクラシックバレエの動きを取り入れた授業を小学生を対象として検証することを今後の課題としたい。

小学校体育における効果的な授業づくりに関して

新藤　駿斗

本研究では，児童の体育に対する心情を捉え，現代の児童は体育の授業にどのような感情を抱いているのか，どの児童も体育の授業に対して前向きに取り組めるような方法を考え，体育の授業に用いることが目的である。そのため，体育の授業に関する文献研究や，小学校教員，小学校中学年児童に体育の授業に関しての意識調査を行った。また，検証授業の対象を大学生にして実践した。

研究の結果，全体の 9 割近くの児童が体を動かすことや体育の授業に対して肯定的な印象を持っていることがわかった。ただ，一定数の児童は体育の授業に対して嫌悪感を抱いており，主な要因としては，技ができないなどの個人的要因や児童間の人間関係や周りの仲間と比べてしまうことによる劣等感によって自己肯定感が低下し，体育の授業が嫌になってしまう集団的要因が挙げられることが分かった。さらに，授業の中で些細なことでも褒める，認める声かけを行い続けることで児童にとってかなりの好影響を与えることができ，体育の授業に嫌悪感を抱いている児童にとっても効果的であることが判明した。教師は児童の体育の授業に対する実態把握をより具体的に行い，児童の不安や苦手意識を取り除き，児童を認めてあげる環境の構築により，より多くの児童が体育の授業に前向きに取り組めるようになると推察できた。

小学校体育科表現運動領域におけるリズムダンス指導について

三浦　杏優

全ての人々が学校教育の中で，体育科の授業や主に運動会などでダンスの経験をしたことはあるだろう。中学校ダンスに対する学習者の意識は様々で，ダンス授業が好きな生徒も嫌いな生徒もいることが報告されている。また，多くの教員はダンス種目の中でも創作ダンスの教育価値が高いことを認めているが，「生徒が好まない」，「指導が難しい」と敬遠することを報告している。そこで本研究では，ダンスを最初に学ぶ小学校体育授業で行われる「表現リズム遊び」「表現運動」の表現運動系の領域のなかで，児童同士の交流や会話，記述方式の学習を多く取り入れることで，ダンスに苦手意識を持つ児童と得意としている児童との意識の差は減らすことができるのかを検証し，明らかにすることとした。

その結果，運動会などでは，見られているから頑張れる，逆に，見られて恥ずかしいとなどと，捉え方が対局することが分かった。また，見る，見られるにとらわれず，話し合いの形式から友だちと共にリズムダンスをつくる活動によって，ダンスの授業づくりをしていくことが肝要であることが分かった。しかし，体を動かす時間が減ってしまうと言った欠点も上げられ，割合や時間配分については，今後の研究の課題としたい。

自己肯定感を育む，運動遊びを取り入れた小学校体育科の授業づくりについて

大塚　未来

本研究は，体育遊びを取り入れたプレルボールの授業を検証し，体育科の授業の充実が児童の自己肯定感を育むことに効果的であるのかについて明らかにするとともに，運動の楽しさに触れ，心も体も健康な児童の育成のための知見を得ることを目的とした。

研究の結果，質問紙調査法では，ゲームのある体育の授業を肯定的に捉えている児童より，ゲームのある授業を否定的に捉えている児童のほうが，自分自身を否定的に捉えていること，すなわち自己肯定感が低いということがわかった。検証授業では，導入に体育遊びを取り入れることが，児童の自己肯定感を育んでいくことに効果的であ

るという結果が明らかとなり，運動遊びは小学校における全ての学年を対象に，発達段階や主運動に合わせて行うことができるとわかった。

また，今後の課題として，①児童同士の話し合いの工夫，②教師の発問や声掛けの工夫の２点が確認された。したがって，今後は小学生を対象として，導入に運動遊びを取り入れた体育授業を検証したい。さらに，児童の実態把握はもちろん，場の安全性や指導上の留意点などについて，再度熟考し，全ての児童が楽しめる体育科の授業を行い，子どもたちの自己肯定感を育んでいきたい。

日本の野球人口が減少している理由について

石毛　勇志

日本人のスポーツ観戦人口の中でプロ野球は 13.7% と最も高く，ついで高校野球が 5.8% となっている。また，小学生が選ぶ好きなスポーツでも高い人気を有している野球だが，近年，小中高生の競技人口が大幅に減少している実態がある。

そこで，本研究では，野球の競技人口が減少している理由について，文献や先行研究から明らかにし，野球に対し興味・楽しさを覚え，愛好的態度を育むことが出来る指導法を明らかにすることを目的とする。

その結果，野球の人口の減少には，①坊主にするのが当たり前のような慣習法的なルールや厳しい練習をする印象②保護者の時間的・金銭的負担③複雑なルールや判断の難しさ，必要な技能の高さに要員があることが明らかになった。

ベースボール型ゲームの授業では，投・打のドリルゲームを毎時間設定し，基礎基本のコツをつかめるようにすることで毎時間の成長による達成感を次時への意欲へとつなげること。また，自分の役割がわかりやすくなること，個々に合わせたレベルでプレーできるようにするために，ルールを簡易化することや道具を選択式にするなど，工夫や手立てが必要であることが明らかになった。今後の課題としては，明らかになった指導法をもとに，授業を考案し，実際に児童に向けた授業を行い，効果的な指導を研究していく。

小学校におけるサッカーの授業の導入の工夫について
―技能差に関わらず，全体が楽しめるサッカーの導入について―

藤元　暉星

体育科の授業の人気は高いものである。

体育科の授業では様々な運動やスポーツを扱うが，その中でもサッカーは児童間で技能差が開きやすい。そのため，授業に対して不安を抱く児童や，意欲を持てないまま授業に参加している児童の姿も見られる。

そこで，筆者は，サッカーの授業において技能差を感じる機会を減らし，サッカーが得意な児童もそうでない児童も双方が楽しく，そして意欲的に参加できるようなものにしていくための単元の導入の工夫を考案した。調査結果から児童はゲーム方式を用いて目標やそれまでできなかったことが出来るような感覚や達成感を得ることで，児童は授業を主体的に楽しむことが出来ることが分かった。

また，本研究では仲間との協力や自身が立てた目標を達成していくこと，技能差を互いに補いながらレベルアップしていけるような授業構成を練ることに重点を置いた。しかし，検証授業を受けたすべての児童から「技能差を感じなくなった」「サッカーに対して好印象が持てた」という回答を得ることはできなかった。このことから，今後の課題として，児童の意見を基にさらに研究を深めていく。

道徳・特活

発達障害グレーゾーンの児童に対する効果的な対応と支援

新井　澄怜

私は卒業レポートで，発達障害グレーゾーンの児童に対する効果的な対応と支援について取り上げた。テーマの設定理由は，教育実習に行った際，授業中や移動の際などに他の児童から遅れをとり，ついていくのに少々困難な児童と出会った。個別に指示を行えばついて来られるが，それでは他の児童を待たせてしまう。そこで，どのような授業づくりをすれば誰一人置いていくことのない授業をすることができるのか，また，生活面でも効果的な支援ができるのかについて，興味を持ったため調べることにした。

内容としては 3 節で構成されている。1 節では，主要な発達障害とその特性についてに加え，発達障害グレーゾーンについて，また，その重要性について述べた。2 節では，教育実習での児童の実態について述べた。3 節では，どのような対応をすることができるのかについてや，効果的な授業づくりについて述べた。

結論として，学級内にユニバーサルデザインを取り入れることや，その児童の特性に合わせた支援をあらかじめ用意しておくことが効果的であるとわかった。特に学習面における遅れや劣等感はいじめや不登校に繋がりかねない。そういったことを少しでも減らすために，日常的に特別ではない支援を取り入れることが重要であると学ぶことができた。

発達障がいを持つ子どもの理解と接し方

前田　夏音

私は卒業研究レポートで，発達障がいを持つ子どもの理解とその子どもの接し方について取り上げた。大学の様々な授業で発達障がいについて触れ，特別支援を必要とする子どもの実態や現場の現状について興味を持ち始めた。そして，教育実習や保育体験等の中で発達障がいを持つ子どもと出会い，適切な接し方や指導，援助の方法を自分自身で理解し，知識を深めたいと考えたためこのテーマを設定した。

内容としては，3 節で構成されている。第 1 節では，特別支援教育の現状について。第 2 節では，本レポートのテーマとなる発達障がいとは何かについて，各発達障がいごとの主な特性を述べている。第 3 節では，実際に出会った発達障がいを持つ園児の実態や保育者の関わりの様子を元に適切な接し方や援助について調べた。

結論として，曖昧な言い方は避け簡潔に話すことや問題行動を子ども自身が理解できるように説明することなど障がいの特性に応じた関わり方は様々であることが分かった。しかし，それらが全ての子どもに適しているとは限らない。幼稚園教諭として，子ども一人一人の発達段階，能力に合わせた個別の指導が求められていることやそれぞれ適した支援や配慮をすることが重要であることも理解した。

いじめられる人は，なぜいじめられるのか ―その特徴と傾向―

脇　　航大

本レポートは，特に教育の場において問題となるいじめ。そのいじめが起こる要因としていじめられる人にも特徴や傾向があるのではないか。また，学校という場でどう対応していくべきか述べたものである。構成は以下のとおりである。1 節では，いじめとは何かその実態について示し，2 節では，いじめられる人の特徴や傾向について理由と共に示した。3 節では，これまで示していたことを基に学校という場での対応策を示した。

いじめは何年たっても，収まるどころか増え続けていく一方である。私は，なぜここまでいじめが無くならないのか疑問を感じた。いじめは，加害者側が最も悪く，してはいけない行動をとっているのは間違いない。しかし，いじめが起こる要因として，すべて加害者側に非があるのか，他に要因はないのか。私は，ある考えが頭に浮かんだ。いじめられている人，つまり，被害者側にも何か要因はないのか。要因はないとしても，何か特徴や傾向があるのではないか。私は，これらのことについて知識をつけ，後に活かしていけるようにこのテーマを取り上げた。

いじめは，これからも起こり，そのたびに適切な対処を行っていく必要がある。そのためには，私一人が力を尽

くしても対処しきれるとは限らない，今回得られた知識を基に，協力体制を築きながら，少しでもいじめが無くなるように努力したい。

発達障碍児の抱える問題と個別的継続型サポートの実践法

矢幡　郁弥

現在，発達障碍や知的障害を抱える障碍児の数は年々増加傾向にある。文部科学省の規定や学校現場の在り方など，障碍児を取り囲む枠組みは決められつつあり，段々と世の中が「障碍」に対し理解を持ち始めているように感じる。

しかし，外側だけ固められる一方，ふと立ち止まって考えてみると，「当事者である子供たちやその保護者のためになっているのか」という問いに対して，甚だ疑問が残るばかりである。現に正解があるわけでは無い。「私一人が考えても変わらない」確かにそうかもしれないが，それでも，「誰のための支援なのか」「なぜ行っているのか」こういった問を今一度考え直すことによって，目の前にいる児童や困っている保護者といった自分の手の届く身近な範囲の力になることが出来るかもしれない。

本レポートでは発達障碍児について考えるとともに，実際に児童を前にした時，私たちが行うべき支援や対応について，一人一人に焦点を当てて，自分自身の実践方法を踏まえながら，個別的継続型のサポートについて考えていく。

保健室登校について ―居場所と環境―

影山　晴か

私は，卒業レポートで保健室登校について取り上げた。テーマを設定した理由としては，まず，教室という狭い空間に何十人もの生徒を閉じ込めて，義務教育という名の教科書通りの教育を受けさせる，日本の教育環境に疑問をもっていた。そしえ，この環境が自分に合わなかった際に，保健室登校をした経験があり，同じような環境の人にもそのような選択肢がある，という事を知って欲しいと思ったからだ。

内容としては，４節から構成されている。第１節では，保健室登校の始まりと保健室の居心地の良さを述べた。第２節では，保健室登校の現状について，具体的な表を使いながら述べた。第３節では，養護教諭と不登校がどう関わっているのか述べた。第４節では，保健室登校の本当の目標について述べた。

結論として，学校に通えなくても保健室登校だけでなくほかに様々な選択肢があるし，教室に戻ることよりも，何が原因で教室に通えないのか，問題点はどこなのかということに向き合い，周りの人と協力しながら改善していくことが大事だということが分かった。

学校における働き方改革について

木下　拓真

働き方改革が提唱されるようになってから数年が経ち，多くの企業などが重要な経営課題の１つとして働き方改革の推進に取り組むようになったが，教育実習を通して教師の一日を実際に目にしてみて，学校における働き方改革の取り組みについて疑問に感じたため，本レポートでは，働き方改革の中でも学校に焦点を当てて述べている。

内容としては，以下の４節で構成されている。第１節では教員の職務が見直されるようになった背景を述べた。第２節では働き方改革の方策について示した。第３節では学校の業務に関して教師一人ひとりの意識，教師たちの本音について述べた。第４節では教職員の「働き方改革」に向けた検討課題として，今後見直していかなければならないことを挙げた。

結論として，これまでのような長時間労働を良しとするのではなく，働き方を見直して教師が日々の生活の質や教職人生を豊かにしていく必要があることを理解した。また，そのようにすることで教師自らの人間性を高め，子どもたちに対して効果的な教育活動を行うことができるようにもなるため，学校における働き方改革は少しずつでも進めていき，業務の改善をしてかなければならないと感じた。

健康

学校教育における性的マイノリティに関する望ましい教育とは

浅沼　なつみ

近年は日本においても性の多様性が謳われ，LGBTQ をテーマとしたドラマや映画も当たり前に放送されるようになってきている。社会が性の多様性に対応しようとしている中，教育現場ではその社会の動きになかなか追いつくことができていないのが現状である。そこで本研究では，性的マジョリティ者および性的マイノリティ者に対しアンケートした結果, 性的マイノリティ者に対して好印象を持っている性的マジョリティ者は有意に多く（$p<0.001$），大半の性的マジョリティ者は性的マイノリティ者に対し不当な差別・偏見意識を持っていなかった。しかし悪印象を持つ回答者も数人見られるため, このような現状には対応･改善が必要であると考えられる。また, 学校生活において, いじめや嫌がらせよりも恋愛や制服・衣服などでの悩みの方が性的マイノリティ者に心的疲労を与えていることが分かった。これらの結果を基に学校教育における望ましい教育について検討した結果, 制服の自由度を高めることと, 異性への関心が高まる小学 6 年生頃に当事者による性的マイノリティに関する講義をカリキュラムに組み込むことが有効的であると考えられる。

若者の恋愛における依存度と自己肯定感の関連性

田村　沙耶伽

近年，若者の自己肯定感は低下し続けている一方で，恋愛関係と自己肯定感の調査において恋愛が自尊心にポジティブな影響を与えることもわかっている。そこで本研究では,「依存」というネガティブな影響に着目し, 若者（16 歳以上 30 歳未満）を対象に，自己肯定感尺度と恋愛依存度尺度を用いて調査を行った。恋愛依存と自己肯定感の関係に加えて, 恋愛依存度および自己肯定感と, その他恋愛関係, 親子関係および SNS の使用状況との関係を検討した。恋愛依存度と自己肯定感の間に有意な相関関係は認められなかったものの，その他恋愛関係と自己肯定感には有意な関係が認められた。また，家庭環境や SNS の使用状況の関連を検討した結果，身の回りの環境による影響や自己の承認欲求を満たすことが自己肯定感や恋愛依存度に繋がっていて，間接的に恋愛依存度と自己肯定感に繋がりがあることが明らかになった。そのため，恋愛状況や親子関係が良好である環境であったり，他人と比較しないようにしたり，承認欲求を抱えすぎないような精神を持ったりすることで自己肯定感や恋愛依存度は良い方向に向くと結論付けられた。